引用文献

用例は、校訂の厳密さと同時に、入手しやすい本よりとりました。漢数字は以下のものの頁数を示します。

（大系ー日本古典文学大系、文庫ー岩波文庫）

大鏡（大系）平治物語（大系）平家物語（大系）教行信証・開目抄（大系、親鸞集日蓮集）近代秀歌・無名抄・毎月抄・風姿花伝・拾玉得花（大系、歌論集能楽論集）吾妻問答（大系、連歌論集俳論集）知連抄（文庫、連歌論集上）舞の本（幸若舞曲集、第一書房）毛詩抄（文庫）盲安杖・反故集（大系、仮名法語集）鑑草、鉄眼禅師仮字法語、葉隠、町人考、駿台雑話、役者論語、道二翁道話、古事記伝、雲萍雑志（以上文庫）尚東軒始（大系）楓翁遺話、武道初心集、講五余話、文明論之概略（以上文庫）いらつめ10号～12号所載「浮雲」批評（二葉亭四迷全集1）福翁自伝（文庫）三太郎の日記第弐（阿部次郎選集、羽田書店）惜しみなく愛は奪ふ、藪柑子集（以上文庫）柳の種（小山書店）地図を眺めて（文庫、寺田寅彦随筆集巻五）現代日本の思想（岩波新書）

（豊田工専講師）

愛知県半田市における サ行四段式活用動詞のイ音便現象とはじめの二音節を高く発音する〔○◐○○〕型アクセントについて

近藤政美

一、はじめに
二、はじめの二音節を高く発音する〔◐◐○○〕型アクセントについて
三、サ行四段式活用動詞のイ音便現象
四、はじめの二音節を高く発音する〔◐◐○○〕型アクセントの生じた原因について
五、むすび

一、はじめに

愛知県半田市、ここは知多半島中央部の東海岸に位置する。西は半島を縦に走る丘陵を背にし、東は衣が浦湾を臨む商工農業の混在した小都市である。江戸時代以前から海上交通により西三河との往来が頻繁であつたが、最近は国鉄武豊線や名鉄河和線の開通によりあらゆる面で名古屋の影響をより多く受けるようになつた。

この地方にはじめの二音節を高く発音する〔◐◐○○〕型という珍らしいアクセントがある。小稿はこの地方の生粋の農民やその子供たちのことばを中心に調査し、周囲に生活している人々のことばをも参考にして、このアクセントの型がどんな時に現われるかを明らかにし、どのようにして生じたかを、それが生じるのに大きな原因になつたと思われるサ行四段式活用動詞のイ音便現象とあわせて考究しようとするものである。

なお、小稿では便宜上高く発音する音節を◐印、低く発音する音節を○印で表わし、〔◐◐○○〕印でくくつてアクセントを示すことにする。

二、はじめの二音節を高く発音する〔◐◐○○〕型アクセントについて

半田市にははじめの二音節を高く発音する〔◐◐○○〕

型のアクセントがある。この型のアクセントは次の二つの場合に表われる。

(A)「咲く」などの二音節の〔○○〕型のカ行四段式活用動詞に「た」などが連なつてイ音便になつた時、

例1　咲いた〔○○○〕咲いた　桜が　咲いた。

2　あそこでせみが鳴いとつた〔○○○○○○〕。

3　今朝のニュースを聞いた〔○○○○〕か。

その他、抱いた、剝いた、巻いた、履いた、引いた、継いだ、沸いた、突いた、拭いた、

(B)「貸す」などの二音節の〔○○〕型のサ行四段式活用動詞に「た」などが連なつてイ音便になつた時、

例1　本を貸いて〔○○○○〕やらあ。

2　あの車を押いて〔○○○○〕やれ。

その他、濾いた、

この地方のことばのアクセントは名古屋方言とちがつて金田一春彦先生のいわれる第二種東京式に属し、岡崎方言に近い。そして、「咲いた」〔○○○○〕と「刺いた」〔○○○〕、「貸いた」〔○○○○〕と「書いた」〔○○○○〕などの語をアクセントによつて識別する点は東京方言と揆を一にする。しかし、「咲いた」類や「貸いた」類をはじめの二音節を高く発音するというのは全国の東京式方言には類のない現象のようである。そして、この地方でもこの種のアクセントはカ行とサ行の四段式活用の〔○○〕型の二音節動詞がイ音便になつた場合にだけ現われるようである。こんな点から考えても、おそらくこの地方においては古い時代にはこの種のアクセントの型は存在せず、四段式活用動詞の音便化がすすむにしたがつて生じたものではないだろうかと思われる。

では、どうしてこのような珍らしい〔○○○○〕型アクセントがこの地方に生じたのだろうか。この問題を解明する上に、特にこの地方においてサ行四段式活用動詞の音便化が他の四段式活用動詞と同様に典型的にすすみ固定するに至つたことが一つの鍵になると思われるので、次にこれについて述べよう。

三　サ行四段式活用動詞のイ音便現象

半田市におけるサ行四段式活用動詞のイ音便現象についてアクセントによつて四群に分けて考察してみた。

第一群　第一音節が高い型の動詞

第一音節を高く発音する動詞「刺す」「出す」「干す」「蒸す」は基本形のアクセントが東京語と同じである。そしてこれらの語に「て」「た」「たり」およびそれら

に準ずる語が続く場合、必ずイ音便になる。

例1　なすに竹刺いてやる。

2　洗うもんはみんな出いとけ（出しておけ）。

3　ぬれたシャツ干いといたか（干しておいたか）。

（付表）

愛知県半田市における
サ行四段式活用動詞の音便とアクセントの例

	語例	基本形とそのアクセント	「た」が連なる形とそのアクセント
第一群 1	刺す	サス〔○○〕	サイタ〔○○○〕
2	出す	ダス〔○○〕	ダイタ〔○○○〕
3	干す	ホス〔○○〕	ホイタ〔○○○〕
4	蒸す	ムス〔○○〕	ムイタ〔○○○〕
第二群 5	起こす	オコス〔○○○〕	オコイタ〔○○○○〕
6	落とす	オトス〔○○○〕	オトイタ〔○○○○〕
7	隠す	カクス〔○○○〕	カクイタ〔○○○○〕
8	くずす	クズス〔○○○〕	クズイタ〔○○○○〕
9	こぼす	コボス〔○○○〕	コボイタ〔○○○○〕
10	にがす	ニガス〔○○○〕	ニガイタ〔○○○○〕
11	訳す	ヤクス〔○○○〕	ヤクイタ〔○○○○〕
第三群 12	かわかす	カワカス〔○○○○〕	カワカイタ〔○○○○○〕
13	差し出す	サシダス〔○○○○〕	サシダイタ〔○○○○○〕
第四群 14	押す	オス〔○○〕	オイタ〔○○○〕
15	貸す	カス〔○○〕	カイタ〔○○○〕
16	濾す	コス〔○○〕	コイタ〔○○○〕
17	明かす	アカス〔○○○〕	アカイタ〔○○○○〕
18	消やす	キヤス〔○○○〕	キヤイタ〔○○○○〕
19	さがす	サガス〔○○○〕	サガイタ〔○○○○〕
20	つぶす	ツブス〔○○○〕	ツブイタ〔○○○○〕

4　芋を蒸いたで（蒸したから）たべえこい。

カ行四段式活用動詞の「咲く」「抱く」「剝く」といつた語に「て」「た」「たり」などの語が連なつてイ音便になるとこれらと語形が同じになるが、このような場合、文脈による理解に頼るだけでなく、主としてアクセントによつてその意味を識別しているのである。たとえば、「刺いた」〔●○○○〕と「咲いた」〔○●○○〕、「出いた」〔●○○○〕と「抱いた」〔○●○○〕、「蒸いた」〔●○○○〕と「剝いた」〔○●○○〕のようにサ行四段式活用動詞に「た」が連なる場合は必ず第一音節を高く発音し、カ行四段式活用動詞に「た」が連なる場合は第一・第二音節を高く発音するのである。

第二群　第二音節が高い型の動詞

第二音節を高く発音する型の動詞「起こす」「落とす」「隠す」「くずす」「こぼす」「にがす」「訳す」などの語も基本形はすべて東京語と同じアクセントである。これらの語に「て」「た」「たり」などが続く場合も必ずイ音便になる。

例5　かあちゃん、あした六時に起こいて（起こして下さい）。

6　学校からもどつてくる時十円落といちゃつた。

7　りんごを机の下い隠いといた。

8　誰かへいをくずいたな。

9　ごはんをこぼいちやいかん。

10　せつかくつかんだとんぼをにがいてやつた。

11　兄ちゃん、ここを訳いてくれ。

「訳す」のように「一字の漢語十す」の形をとる語も四段式に活用させ、同じようにイ音便になる。この語については「訳」も単独で用いられるので語源意識はあるが、頻繁に用いているうちに「起こす」などの語への類推によつてイ音便に発音するようになり固定したのだろう。同じようなことばだと思われる「愛す」などが音便の形をとらず「た」が連なる時「愛した」となるのはアクセントの相違（「愛す」〔●○○○〕）から類推作用が働かなかつたことと、三重母音とイ音の連続を避けようとしたためであろう。「託す」「辞す」というような語は日常ほとんど用いられない。

第三群　第二・第三音節が高い型の動詞

第二・第三音節を高く発音する型の動詞「かわかす」「差し出す」も基本形は東京語と同じアクセントである。これらに「て」「た」「たり」などの語が連なる場合も必ずイ音便になる。

例12　この服雨でぬれちゃつた。かわかいといてくれ。

13　おつつあんがれい（おじさんのところへ）手紙を差し出いとけ。

この場合、アクセントは基本形と同じで第二・第三音節を高く発音する。

第四群　平板型アクセントの動詞

平板型アクセントの動詞「押す」「貸す」「盧す」「明かす」「消やす」「さがす」「つぶす」などの語も基本形はすべて東京語と同じように平板型に発音される。そしてこれらの語に「て」「た」「たり」などの語が続く場合必ずイ音便になり、「て」「た」「たり」などの語の前の二音節が高く発音される。

例14　おらああの車押いてやつとつた。

15　あの本を貸いてくれ。

16　これはあずきをつぶいて盧いたあんだ。

17　きんのは伊吹山の頂上で夜を明かいた。

18　電気を消やいとけ。

19　今、あの本さがいとるんだ。

20　だんぐりをこまこつぶいてからならすだぞ。

カ行四段式活用動詞も「て」「た」「たり」などの語が続くと必ずイ音便になるので、これらと語形が同じになる場合もあるが、こんな時は先に触れたように、「貸いた」〔○●○○〕と「書いた」〔○●○○〕、「盧いた」〔●○○○〕と「扱いた」〔○●○○〕のように主としてアクセントによつてその意味を識別している。

このように、この地方では老幼を問わず住民達の間の会話では、サ行四段式活用の動詞は、他の四段式活用の動詞と同じように「て」「た」「たり」又はそれらに準ずる語が連なる時必ずイ音便になる。その際、

起伏型アクセントの語は、二音節語と三音節語においては音便になるイの前の音節を高く発音し、四音節語においては音便になるイの前の二つの音節を高く発音する。

平板型アクセントの語は二音節語も三音節語も音便になるイとその前の音節を高く発音する。

そして、それらの語が音便になつた時とカ行四段式活用動詞に「て」「た」「たり」などの語が連なつてイ音便になつた時と語形が同じになる場合、ほとんどアクセントによつて両者の意味を識別しているので、この地方の言語体系の中ではそれらが混同されるということは非常に少ないのである。

四、はじめの二音節を高く発音する〔○●○○〕型アクセントの生じた原因について

前節で述べたように、この地方においてはサ行四段式活用動詞に「て」「た」「たり」などの語が連なる時、他の四段式活用動詞と同様にすべての語にわたつて音便になり、それが固定するに至つている。そのために、カ行四段式活用動詞に「て」「た」「たり」などの語が連なつて音便になつた時と語形が同じになるものが多数生じた。特にそれは二音節語に多い。

例1　刺いた―咲いた、出いた―抱いた、蒸いた―剝いた。

2　貸いた―書いた、濁いた―扱いた。

3　押いた―置いた。

現在この地方においては日本語の多くの同音語をアクセントによりたくみに識別して使用している。おそらく四段式活用の動詞の音便化がすすんでこれらの多くの同音語が生じた時も人々は会話中これらの語の混同を避けるためにアクセントによつて識別しようと努めたであろう。このこと、つまり他の地方とちがつて、この地方においてサ行四段式活用動詞のイ音便化が他の四段式活用動詞と同じようにすすんでカ行四段式活用動詞の音便になつたものとの間に多数の同音語を生ぜしめたこと、そして人々がそれらの語の混同を避けるためにアクセントによつて識別しようとしたことが〔○●○○〕型アクセントを生む一つの契機になつたのではないだろうか。

そして、右にあげた同音語のうち、例1においては「咲いた」などのカ行四段式活用動詞が〔●○○〕型アクセントになり、例2においては「貸いた」などサ行四段式活用動詞が〔○●○〕型アクセントになつている。文例3においてはカ行四段式活用の「置いた」とサ行四段式活用の「押いた」はともに〔○●○〕型になる。この点から四段式活用における五十音図の行には関係がなく、「咲く」「貸す」など基本形において二音節目を高く発音する語に「た」などが連なつた時〔○●○○〕型アクセントが生じているのである。

ではこの〔○●○○〕型アクセントがなぜ生じたか。この点については推論の域にとどまる。サ行四段式活用動詞のイ音便化がすすみ、カ行四段式活用動詞との間に多くの同音語が生じた時これらをアクセントによつて識別する必要はあつた。が、東京語においても一部両者を識別しているように、既成のアクセントの型、たとえば〔○●○○〕型などを用いて「咲いた」「貸いた」を発音しても目的を達することはできたはずである。現に、こ

の地方の出身者が共通語を話す時には「貸して」〔○●○○〕、「押して」〔○●○○〕などとなるのである。にもかかわらず新しい型を生じるに至つたのは、一方に表中の第四群の「明かす」「消やす」「さがす」「つぶす」のような三音節語で「た」が連なると「明かいた」〔○●●○〕のように、音便になるイとその前の音節を高く発音する型があつたため、おそらく「咲く」「貸す」などの二音節語も音便がすすむにしたがつて音便になるイとその前の音節を高く発音するという点を、言いかえれば後の三音節を〔●●○○〕にそろえようとする作用がはたらき、東京式方言の中では珍らしい〔●●○○〕型というアクセントを生むに至つたのではないだろうか。

五、むすび

以上をまとめてごく簡単に述べると次のようになる。

愛知県半田市およびその周辺にはじめの二音節を高く発音する〔●●○○〕型という全国の東京方言にはみられないと思われるアクセントの型がある。

この型は「咲く」「貸す」といつた第二音節を高く発音するカ行とサ行の四段式活用の二音節の動詞に「た」などの語が連なつて「咲いた」「貸いた」のようにイ音便になる時だけあらわれるようである。したがつてこの型は古い時代にはこの地方に存在せず、四段式活用動詞のイ音便化がすすむにつれて生じたものであろう。

この地方においてはサ行四段式活用動詞の音便化が他の四段式活用動詞と同じようにすべての語にわたつてすすんだため、カ行とサ行の四段式活用動詞が「た」などの語を連ねてイ音便になる時、両者の間に多数の同音語を生じた。これらの多数の同音語をアクセントによつて識別しようとしたことが一つの契機となり、他方、四段式活用動詞の三音節語がイ音便になつた「消やいた」〔○●●○〕などがあつたため、音便になるイとその前の音節を高く発音する点を、言いかえれば、後の三音節をそろえて発音しようとした類推による作用が直接の原因になつて東京式方言には珍らしいはじめの二音節を高く発音する〔●●○○〕型アクセントが生じたのであろう。

付記　この小稿を書くにあたり金田一春彦先生にいろいろ御指導していただきました。厚くお礼申しあげます。